

## 46 『医心方』巻三における引用書の配列についての考察

島山奈緒子

明治国際医療大学大学院 博士後期課程

『医心方』は、永観二年(984年)に針博士の丹波康頼(912-995)によって編纂され、円融上皇に献上された、現存する日本最古の医学全書である。

内容は、医学総論、経穴部位、体の各部位ごとの病気に応じた治療、胎児の発育、養生、房中術まで、多岐にわたっており、治療法は、薬物療法を主とするが、鍼灸治療も取り入れている。ほぼ全編が中国医書からの引用で成っており、引用書の中には、早くに散逸してしまったものも多く含まれ、唐代までに成立した、佚書の内容を伺い知ることのできる貴重な資料でもある。

江戸の安政年間の翻刻までは、長く半井家に秘蔵され、容易に目にすることは叶わなかった。近年、影印や活字版が出版され、目にしやすくなったとはいえ、版本と巻二十八房内以外の研究が進んでいるとは言い難い。

『医心方』の各編には、引用書が明記されているが、書名の配列は一定ではない。本発表は、各編を構成する引用書の配列により、編集の意図を探るものである。今回は、現代でもよく見られる脳血管障害を中心とした「中風」について述べられている巻三の編の引用書の配列について、考察を行った。

治療について書かれている巻の基本的な構成は、『諸病源候論』に倣い、疾病ごとにまとめられ、いくつもの編に分けられている。編の配列は、その巻が取り上げる疾病の総論、もしくは代表的な疾病から始まり、以下その疾病のバリエーションを挙げる。

巻三は、25編より成っており、「風病証候第一」といった総論から始まり、「治頭風方第七」「治中風身体不仁方第十五」「治中風癩病方第二十」など、「中風」の関連病症に対する治療法や、脳血管障害以外の「中風」の記載もある。治療方法については、他の巻と比較して、薬物療法と鍼灸治療がバランスよく含まれていることから、巻三を取り上げた。

例えば、「風病証候第一」の配列は、『黄帝太素』『素問経』『医門方』『病源論』『小品方』『録驗方』の順であり、『黄帝太素』で「風」は「百病之長」であることが述べられ、さらに楊上善注を引いて「風」は人や物を生育させるが、病の元となることも述べている。『素問経』『医門方』では『黄帝太素』の裏付けになるような内容を引く。『病源論』では自然界に吹く風によって引きおこされる「中風」が五臓別に分類されており、「風は四時之氣、分布八方」と「風」が細かく分類されることが示唆されているが、具体的な分類はない。これは、『諸病源候論』に「風」の分類が記載されていないことによるものであろう。『小品方』では、『病源論』で内容が挙げられていない「八方風」や四季の風、日常生活におけるものや体質別の中風が細かく解説されている。最後に『録驗方』では、「風」を自然界に吹く「遠風」と、人の生活の場で吹く「近風」に分け、「近風」によって引きおこされた病の具体例を挙げている。

この編では、『黄帝太素』を「風」の定義に用い、『素問経』『医門方』で補い、さらに『病源論』で「風」で引き起こされる病である「中風」の定義と五臓別の「中風」の解説をし、『小品方』では、「風」の種類の「中風」を解説し、『録驗方』で自然界の「風」とは別の「風」による病を紹介する。

ここだけを見ても、総論から分類の順になるように引用し、分類された具体的な「中風」も、原因が、自然界の「風」から、人工的に起される「風」へと並べられている。これは、一般的な原因から特殊な原因へと配列されており、編の初めから順に読むだけで、「中風」の要点が理解できるように配列されていると言える。これにより、丹波康頼は病気を体系的に捉え、各編の内容に即したものを、様々な文献より引用するという、編纂意図を見て取れるのではないかと。